2023年図書館書評コンテスト応募用紙

受付 No. 0026

麗澤大学図書館

書　名	世界遺産―理想と現実のはざまで		
著　者	中村俊介	請求記号	709/N37

著者 のプロフィール・紹介

1965年熊本県熊本市生まれ
早稲田大学教育学部地理歴史専修卒業
朝日新聞社入社、新潟支局、西部本社学芸部、東京本社文学部、西部本社編集委員をへて現在大阪本社編集委員考古学、歴史、文化財、世界遺産、伝統工芸などを担当している。

本の概要・要約

近年情報化の発達により世界の国々との距離が縮まり世界遺産は身近な存在となった。世界遺産条約採択から約半世紀、登録物件は1000件を超え、今なお増え続けている。

世界的に認知度が高まる一方で、国々の思惑が渦巻く登録合戦や政治的介入、圧力による無節操な登録の乱発が各地で多く起こっている。伝統社会の地域バランスの崩れや、紛争地帯での攻撃目標、駆け引き材料による破壊など世界遺産登録によってかえって危機を生じたケースもあり、世界遺産を取り巻く環境は複雑さを増し、様々な課題や矛盾が表面化し始めている。このまま進めばユネスコの理想である人類共通の遺産とはかけ離れていってしまう。

そのため、人類社会がいかにその状況に立ち向かい課題を克服しながら前進していくかを真剣に考えなければならないことを本書は問うている。

論評(この本を読んであなたが感じたこと、心に響いたこと、主張等)

世界遺産は、はじめは人類共通の遺産として、後世に伝えるために世界全体で守っていくという考えから始まった国際的な取り組みであった。しかし、今日に至るまでに世界遺産を取り巻く環境は登録物件が増えると同時に複雑化を増し、大きく変化していることを理解することができた。世界遺産という言葉を知っている人は多いと思うが、単なる「有名な場所」と捉えられているように感じた。また政治的利用は日常茶飯事であり、「我が郷土からも世界遺産を」というように自治体の観光誘致活動は過激さを増している。そのため、資産価値が曖昧なものやローカルな資産が推薦されることも多くなり、評価する側も困難を極めている。

国際社会は刻一刻と変化を続けていくものであると私も思うため、多様にある課題を解決していかなければならないが、世界遺産において「変えなくてはいけないもの」と「変えてはいけないもの」が存在し、後者はまさに「人類共通の遺産として、後世に伝える」ことであると感じた。

世界遺産は単なる宝物ではなく、地球の多種多様な文化を尊重し、地球の環境の保護などの活動を通して、私たちがこれから長く生きていくために必要な資産であり、世界存続の象徴であることを忘れてはならないと強く感じた。

この本のおすすめポイント(どんな人にこの本を勧めたいか)

まず、世界遺産に興味がある人の必読な著書である。記者として様々な世界遺産に出向き長年取材したことがまとめられており、具体的な世界遺産を取り上げているため、世界遺産の知識をより深めることができる。また、東南アジアや西アジアなどの国際理解を深めたい人も世界遺産から国際情勢について理解できる内容となっていると感じるためおすすめである。